

# 衣食住遊

第五回

## 程よい加減

文 甲賀 雅章

こうがまさあき／クリエイター。CI戦略、ブランディング、コミュニケーションデザイン、新商品開発、新業態開発、空間プロデュース、イベントプロデュース等、活動領域は広い。1992年に「大道芸ワールドカップ in 静岡」を立ち上げる。大阪府立江之子島文化芸術創造センター館長、「大阪国際児童青少年アートフェスティバル」プロデューサー等、役職多数。

遊とは実に意味の深い言葉である。後先にくる一文字で、がらりとそのニュアンスを変えてしまう怖い文字でもある。と同時に、私たちにとって生活を彩るために欠かせない行為であり要素であることも確かだ。ある男の、この男の女遊びというか、たしなみは、女性たちから言わせれば、かなりひどいものだが、違う角度から見れば魅力的でもあるのだ。また、この男の妻が巧いことを言う。病気なら治しようもあるけど、癖はなかなか直らないのよね。名言だ。

それはさておき、元来遊びというものは、ストレスが溜まらない。むしろストレスを軽減してくれるもののはずである。ところが、これは度を越し始めると、むしろストレスの原因にもなり始める。だから、私は何事もほどほどにしている。まあ、自分の飽き性分をごまかす言葉でもあるのだが。先ほどの話ではないが、ほどほどにしておかないと、ひどい目に遭う。遊び上手というものは、この程よい加減を心得ている人のことをいうのではないだろうか。引き際が実にキレイである。未練を残さない。そして、相手を嫌な思いにさせない。だからこそ、問題も起らない。遊びは度を越すと、様々な関係性を壊しかねない。これは、誰しもが肝に銘じておく必要がある。決して、私の教訓からモノ申している訳ではない。

さて、私は自遊人を気取り、名刺の肩書きに使っていた時代がある。職業とか立場で自分を語るのが嫌になってきた頃だ。しかし、これは、あまりにも格好つけすぎたのか、不評であった。それ以後は創造人と言ってみたいしたが、結局はプロデューサーに落ち着いてしまった。クリエイターが一番しっくりくるのだが、何か街うよううで、照れがある。まあ、今回はご愛敬ということだ。



Illustration by Mizukami Tamae

「人は遊びの中で完全に人である」これはフリードリッヒ・シラーの著書『人間の美的教育について』の一節であるが、うーん、なるほど。賛同できる。キールホフナーは人間の作業モデルを三つに分けている。日常生活、遊び、仕事。遊びが、人の心を満足させるために必要なものだとすれば、スターバックスのコンセプトである「Third Place」は実に巧いマーケティングである。

近頃の私の遊びといえば、自分の身体との遊びである。自分を遊んでいるのである。シラーの言葉を借りれば、理性的衝動とともに遊戯衝動を構成する感性的衝動といふことになるのか。5月に役者に初挑戦した。しかも、いきなりベテラン女優との二人芝居。芝居を通して多くの気づきがあった。ああ、なるほど！ の連続であった。9月にはコンテンポラリーダンサー、そしてパフォーマンスアーティストとして初めて舞台に立った。4日間で計7公演をこなした。63歳でのデビューである。自分の身体と向き合うのは生まれて初めての意識かもしれない。自分の中に眠っていた何かが覚醒したことは確かだ。

デザイナーとして様々な課題解決をし、プロデューサーとして「大道芸ワールドカップ in 静岡」をはじめとして様々なコト起しをしてきた私にとって、芝居もダンスも、実に純粹で無邪気な創造欲求、表現欲求である。ある意味、芸術との遊戯のようでもある。そして、なかなか思うようにはいかない。手強い遊びでもある。2015年の1月には、さらに大きな舞台に立つことになりそう。いい気になっては、いかん。遊びに止めておくうちが花である。くれぐれも度を越さぬように、ほどほどに。そう言い聞かせている。それにしても、実に辛い。そして、実に面白い。実に楽しい。困ったものだ。